

## 大平新総裁に聞く

聞き手・四国新聞編集局長 阪根 義雄

第九代自民党総裁に選任された直後の発言。田園都市構想、家庭基盤充実策などを説くとともに、県民と栄辱をわかつ覚悟で国政に取り組むと決意を表明した。阪根氏は現在、四国新聞社顧問。

### 県民と栄辱をわかつ

先の総選挙は鮮やかな勝利だったが、なかでも総裁の地元である香川は、ほぼパーフェクトの成績だった。これは総裁に対する県民の期待の表れだと思いが、決意はどうか。

大平総裁 昭和二十七年以来二十六年余にわたって終始心のもったこ支援をいただき、さらに総裁選では投票率、得票率ともに最高を記録させてもらった。そして総裁に選任されたことは光栄であり、大きな感激である。全くこ支援のたまもので、満腔みんこうの謝意を申し上げたい。これからはむずかしい仕事、責任の重い仕事と取り組んでいかななくてはならないので、一層のご鞭撻べんたつとご指導をお願いしたい。私は県民の皆さまと栄辱をわかつ覚悟でやっているので、期待に沿うようベストを尽くしてきた。

「栄ちゃんと呼ばれたい」といったのは佐藤元総理。大平総裁には「おとうちゃん」とか「鈍牛」というニックネームがあるようだ……。

総裁 若いころから「おとうちゃん」のニックネームだった。親しみやすかったのではないか。おかげで大勢の友人に恵まれた。国民に対しても親しみ深いものであってほしいと思うし、私もまたそう努めたいと思っている。

「アーウー」という 大平話術 も、いまではもうすっかり有名になったようだが。

総裁 あれは、自分の考えをまとめる間合いをとっているわけだ。今後は、ますます間合いを必要とするので「アイウエオ」になるのではないかなあ。(細い目を、さらに細めて大笑い)

大変な読書家として知られ、政界随一といわれているが、どんな本を読んでいるのか。

総裁 乱読だ。歴史、伝記、随筆、社会、政治、経済、宗教……。ただ小説だけは読まない。小説は全体を網羅しているので、本当はためになるのだが、それだけの時間がない。むしろ、政治家は小説を読むのではなく、書くくらいでなくてはならないのかも知れない。その点では(政治家として)失格かも知れない。

総裁は池田蔵相の秘書官、池田内閣の官房長官時代、女房役として力量を發揮したことから、大平キヤッチャー説を説く人がいるが、こんどはピッチャー。ピッチャーとキヤッチャーは、どこが違うのか。

総裁 ピッチャーは強いリーダーシップと勇気がある。私は、そういうたちではない。弱虫だ。したがってオーケストラでいえば、コンダクターみたいな役割以上のものは出来ないのではないか。評価と称賛の政治は出来ないにしても我慢が出来るような政治をしたい。一応、わかるではないかという政治をしなくてはならないと思っている。

郷土には三土忠造、津島寿一といった優れた政治家がいた。その流れの中に総裁もいると思う

のだが、どうか。

総裁 三土先生は見識、学問もあり、しかも政治家的豪胆なところがあって魅力があった。また津島先生は天才的というか秀才であり、学問だけでなく芸術にも素質があった人で、多彩な能力を持っていた。二人の先輩に比べると、私など平凡で、とりえはないが優れた人が必ずしも最高の地位にくとは限らない。歴史のいたすらだ。

### 「信頼と合意」の姿勢で

総裁は本音と建前が一致した政治を唱えているが、どうか。

総裁 建前と本音が一致するよう努めなくてはならない。最初から双方は一致しないものと決めるかかのような横着なことをしてはならない。一致させる努力が必要であり、大切だ。

現在の日本は転換期にあるが、現状をどのように認識しているか。

総裁 経済を重視した時代、経済に傾斜した時代から、精神、文化、宗教という目に見えないものに目を向けかけた時代といえる。経済はどうでもよいと考えているのではない。経済も大事だが、目に見えない世界についても、経済と同等の関心と努力を払わなければいけない時代となっている。そういう意味では、たしかに転換期にさしかかっている。日本には、そのことが顕著に言える。

総裁は池田内閣の当時、「寛容と忍耐」というキャッチフレーズを演出したが、大平政権ではどのようなキャッチフレーズを考えているか。

総裁 いろいろ相談しているが、「信頼と合意」の政治を追究しようではないかと考えている。現在

は信頼が壊れた時代と言える。親と子、先生と生徒、老人と若者、中央と地方、生産者と消費者、それぞれの中に、ある種の不信が芽生えてきている。これを修復して、ぜひ信頼を回復しなければならぬ。その中で、出来ることならある種の合意を求めていくことが今のわれわれの任務だ。これは、国と国の間でも同じことが言える。

大平政治を展開するに当たって、どこに力点を置くか。

総裁 量から質への転換、見えるものから見えざるものへ出来るだけ重点を置きたい。ゆとり、落ち着き、健康、平和などがそれだ。経済的な繁栄、拡大、生産水準の拡大というものはかりでなく、目に見えないものを追究していくことが大切だ。

具体的な外交政策として、環太平洋連帯”を打ち出しているが、どのようなものか。

総裁 ヨーロッパにE.C.があり、アフリカにはアフリカの組織がある。また、ラテンアメリカにはラテンアメリカの組織があるように、太平洋地域には太平洋圏があつていいのではないかと思つていゝ。しかし、それはヨーロッパにあるE.C.とは性格が異なる。E.C.は等質の国の集まりだが、太平洋地域は先進工業国もあれば、発展途上国もある。立場は立場として、個性的な状況をそのままに、一つの太平洋を結ぶ共通の連帯を考えていくべきではないか、ということだ。

日中に次ぐ最大の外交課題である日ソ関係を今後どのように進めるのか。

総裁 昭和三十二年に国交が復交していらぬ、交流もしげくなつたし貿易も盛んになつてきた。多方面にわたつて日ソ関係は発展している。これは自然の成り行きだ。今後とも精力的に進めていきたい。国内政策については、いわゆる“二つの計画”が打ち出されているが、その一つである田園都市構想はどのようなねらいを持っているのか。

総裁 東京、大阪に中枢が集まり、あとは手足だけという日本は健全でない。二〇二〇年の間に、人口の三分の一が都市へ集中し、都市では交通問題、住宅問題、環境問題などいろんな文明の問題が出てきている。こんなことでは、ますますわれわれの四つの島は住みにくくなる。地方には、住み良い定住圏、生活空間を作っていかなければならない。そこには住宅があり、教育施設、体育施設、福祉施設もあり、地場産業など雇用の機会もちゃんとあるという状況が望ましい。しかも、それは高松市ぐらいの三十万都市がよい。先祖の墓がどこにあり、自分が卒業した小学校がどこにあるかわかるようでないといけない。このような住み良い生活空間にするには、田園都市構想を導きの星として、いろんな政策を組み合わせ工夫していけばよい。

## 家庭はオアシス

もう一つは、家庭の基盤充実を打ち出しているが……。

総裁 国敗れて山河と家庭があつたから、日本は立ち上がることが出来た。だから家庭を壊してはいけない。住宅政策、相続制度、教育政策にしても、いろんな見地から家庭を見直していつて、間違いがあれば直していかなければならない。それがないと本当の意味での日本の再建はない。家庭は善意だけが生きている。無私、無欲なオアシスだ。これを壊さないよう住宅、教育、福祉政策などをもう一度見直そうというのが私の主張だ。

香川県は瀬戸大橋、新空港などいろんなプロジェクトを推進しているが、四国の開発をどのように位置づけているか。

総裁 京阪神のためある四国ではいけない。また、京阪神に奉仕する四国であってはならない。やはり、四国の個性、特徴を活かして、京阪神と対等の立場を作っていかなければならない。まとまったプロジェクトを展開する場合、四国の方がはつきり自覚をしてやっっていかなければならない。あくまでも京阪神の従属物になってはいけない。

激動、混迷の社会にあつて、大平新総裁の『庶民の政治』に共感する県民、国民は多い。今後の一層の健闘に期待したい。